

Title	古版経済書解題 一千八百三十二年版ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン著 国家経済研究
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.11 (1938. 11) ,p.1539(73)- 1553(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19381101-0073
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381101-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381101-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治初頭に於ける保護貿易思想と R. P. Smith の來朝

七二 (一五三八)

呈出を版し、使節にも隨行した若山儀一が、十年の譯出になる「自由交易穴探」の「廣告」(序文)に於て、

「且保護政策を主としたる書類にても傑利ケイリのは大部に過ぎスミス私密斯スミス外務省に昨年まで備チル越兒士兒チル(註 William Elder)のは高尙に過貌ウツヤ奄ウツヤ(Francis Bowen)のは備する所あり革利里ケイリ(Horace Greeley)のは備はらず須利灣ウツヤ(Sir Edward Sullivan)のは略に過ぎたり特り本書(John Barnard Byles)は...」

と書いてある所に、彼とスミスとの實際的交渉を想像させるものがある。

尙餘談乍らスミスの人物に就ても二三傳はいつて居る。極めて豪放なる性質であつて、副島外務卿・米國公使・デ・ロングと意氣投合して、「肌脱シヤフスクリぎ外交デイゴマシ」を現出した。日常生活は日本人に擬して和服を着用し雙刀を帯びて外國人の危険視された市中を濶歩した(田保橋潔著明治外交史)癡刀令後も木刀の小さいのを腰から離さなかつた相である(中田敬義氏談)駐英公使寺島宗則は、五年九月二日ロンドンから副島外務卿に送れた外交上の意見書の一條にかう書いた。

「一、外務省スミス事不行狀頻ニ相聞へ假令名言ありといへとも外務省之論不行事ニ至リ可申哉 其妾ニ袴ヲ着セ同行シ或ハ横濱市街ニ酔倒スルノ類無數 今ノ大使歸朝セハパークス等も歸リ可申其彼カ醜ヲ鳴スニ無相違自今二年は雇ふべき事にて不得己ハ嚴ニ彼ニ禁酒ヲ命シ服セサレハ辭セシメテ諸シテ破棄するも同様に約セラレテハ如何」(大隈重信關係文書第一五一〇頁)

(一九三八・一〇・二六)

## 古版經濟書解題

一千八百三十二年版ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン著  
『國家經濟研究』

高橋誠一郎

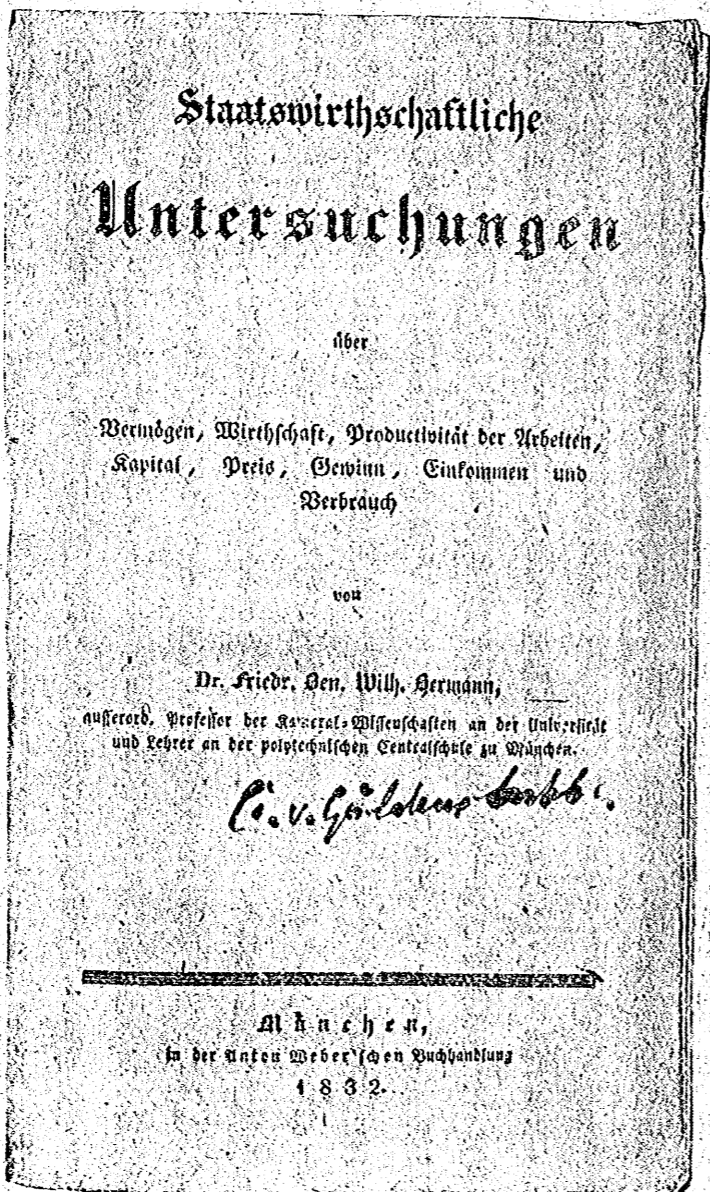
ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン(Friedrich Benedikt Wilhelm von Herman)は一千七百九十五年十二月五日バイエルン、ディンケルスビュールに生れ、エルランゲン及びヴュルツブルグに學び、一千八百二十一年、エルランゲンに於いて官房學講師(Docent der Kameralwissenschaften)としての資格を得、同地に於いて數學教師と爲り、同二十五年、ミュンベルグの工藝學校の數學教授に擧げられ、同二十七年ミュンヘン大學に於ける官房學の臨時教授(ausserordentlicher Professor)に任ぜられ、更に同三十三年には正教授(ordentlicher Professor)の椅子に着き、同三十五年にはミュンヘン科學學士會員と爲つた。彼れが同大學に於いて正教授に任命せらるゝを得たのは其の前年、即ち一千八百三十二年に出版せられた彼れの名著『國家經濟研究』(Staatswirtschaftliche Untersuchungen über Vermögen, Wirtschaft, Productivität der Arbeiten, Kapital, Preis, Gewinn, Einkommen und Verbrauch.)の好評なりしに由るものである。

古版經濟書解題

七三 (一五三九)

彼れは一千八百三十六年、政府によつて、工藝學校視學官、三十七年、最高教務及び學務局員に任命せられ、又、一千八百三十九年には政府の命を受けて巴里博覽會を參觀し、其の記事 *Die Industrienausstellung zu Paris im Jahre 1839.* を上梓した。彼れは又、一千八百三十九年以來、バイエルン王國統計局員として活躍し、五十年には同局長に就任した。同國統計局は其の一千八百五十年の改造に由つて惟り普魯西の其れを除いては他の孰れにも劣らざるの地位に立つに至つた。ヘルマンは一千八百五十年より同六十七年に互つて統計局長の資格に於いて統計的研究を刊行した。 *Beiträge zur Statistik des Königreichs Bayern. Nach amtlichen Quellen herausgegeben nach F. B. W. v. Hermann, Heft 1 bis Heft 17, 1850-1867.* が是れである。彼れは一千八百四十五年には内務省參事官、一千八百五十五年には樞密院議員と爲り、一千八百五十二年に、維納に開かれた獨逸聯邦關稅會議其の他にバイエルンを代表して出席し、熱心に全獨逸國民的關稅及び通商制度を創設するが爲めに努力した。彼れは一千八百四十九年二月、「獨逸なくしては獨逸なし」(Kein Deutschland ohne Oesterreich) を標語とする所謂大獨逸黨(*Grossdeutsche Partei*) を組織し、獨逸なき聯邦はより小なる獨逸を生ぜしめずして、より大なる普魯西を生ぜしむ可きことを主張した。彼れは一千八百四十八年ミュンヘン市を代表してフランクフルト・アム・マインの國民議會に出席し、左翼中央黨の一員として投票し、獨逸を包含する全獨逸諸邦の統一を唱道した。彼れは一千八百五十五年政界より退隱し、其の教授職と學問的研究に盡瘁した。彼れは一千八百六十八年十一月二十日、肺炎に罹り、其の死期の迫れるを知り、其の氣力の許す限り、彼れの舊著「國家經濟研究」の新版に加へらる可き、變更の箇所を其の子に書き取らせた。同月二十三日、ミュンヘンに逝く。「研究」の増訂版は彼れの控書を基としてヘルフェリッヒ(J. A. R. von Helfferich)及びマイン(Georg von Mayr)の兩博士によつて整理せられ、

兩者連名の一千八百六十九年十月十日附の序文を附し、翌七十年、單に *Staatwirthschaftliche Untersuchungen.* と題して出版せられた。茲には初版本の扉を寫眞版として掲げることとした。



## 二

『國家經濟研究』はヘルマンの唯一の理論的著作であつて、彼れは此の書によつて獨逸經濟學に於けるスミス・セイ學派の最も永續的價值ある文献を残した。彼れは獨創に富める鋭敏にして且つ周到なる推論家であつた。彼れはフォン・チューネン(von Thunen)及びフォン・マンホルト(von Mangoldt)と共に、獨逸的分析の傳統が歴史學派によつて高潮せらるゝに至る以前に於ける其の表明者として傑出するものである。這般の傳統は先づスミスの『國富論』に對するジャン・バチイスト・セイの解釋に基礎を有するものであるが、而も、そは又自國の哲學から幾分の影響を與へられなければならなかつた。ヘルマン等の以前に於いて效用理論は其の先蹤によつて既に著しく明瞭ならしめられ、發達せしめられて居つた。熱心なるカント學徒ゴットリーブ・フッフエランム(Gottlieb Hufeland)は全然カントの『純粹理性批判』の觀察方法を以つて進むと共に、主としてセイ及びローダゲールの業績に追隨して、純然たる主觀的心理學的價值理論を展開した。(昭和四年版拙著『經濟學史』三〇—二頁參照)。而して彼れよりも更らに、一切の價值を以つて人間精神の活動に基くと做すの意見を強調するものにヨハン・オイゼビオス・ロット(Johann Friedrich Eusebius Lotz)があつた。(同三〇三頁參照)。

ヘルマンは其の著の緒言に於いて、現在の經濟學の弱點を指摘し、而して、其の本文の初めに於いて、經濟學の根本概念及び原理に就いて述べ、先づ財を分つて、内部財及び外部財と做し、前者を以つて、各人が彼れ自身の天與の賜及び彼れが自動的に自己の中に生成する所のものと做し、後者を以つて、彼れが外界の援助を通じて欲望滿足の爲めに生産し若しくは取得するものと觀る。或る人の内部財は他人に對する外部財たることあり得る。例へば、或る人が直接に言語、動作其他によつて、若しくは間接に他の外部財と結合して是れ等のものを他人に享樂

せしむるが爲めに交付する場合の如きである。(Staatswirtschaftliche Untersuchungen, 1832, S. 1.)。次いでヘルマンは價值、富、財産、等の諸概念の定義を構成し、之れを精確ならしむるに努め、各箇經濟の原理を以つて利己なりと做し(a. a. O., S. 12.)、而して個人的利益が公共の福祉と撞着するに至ることが如何に頻繁であり、其の能く一般的幸福に貢獻し得る所が如何に不充分であるかを論證せる後に於いて、一身上の利害によつて動さるゝ個人的活動を以つて國民經濟の一切の要求に應ずるに足るものと做すスミス學徒の大多數によつて表明せられた學說に同意すること能はざる旨を宣言し、「共同心」も亦、一國民の經濟的發達の根本條件たることを主張した。(a. a. O., S. 15.)。彼れは實に自利心と共同心に於いて經濟の二動機を看出したのである。而して彼れは所謂理論的國民經濟學を自利心の研究に、國民經濟政策を共同心の其れに基かしめんことをすら意圖したのである。

次いで、彼れは勞働の生産性に就いて論じ、技術と經濟とを峻別した。前者は一定の物理的原因の行使による一定の物理的結果の生産に關するものであり、後者は、最少犠牲を以つてする最大利得の原理に基ける財貨の數量の處理に關するものである。彼れは又、經濟的生產を(一)生産者の見地(二)消費者の見地、及び(三)國民經濟全體の見地より論じた。生産者は彼れが其の國の當該職業に普通なる利潤率を以つて、彼れの資本の支出を回收する場合には、其の勞働を生産的と稱するの常である。消費者は彼れが其の給付を利用することを得、且つ相當なる價格を以つて之れを取得することを得る總べての種類の勞働に生産性を歸與する。最後に、全體としての國民經濟は市場に於いて賣り出さるゝ財貨の量を増加する總べての勞働を以つて生産的と看做すのである。(a. a. O., S. 27 ff.)。

## 三

第三にヘルマンは資本に就いて論じ、獨逸書の多數に於いても亦、アダム・スミスの説が祖述せられて居つたこ

とを認める。ザルトリウス、リュエーダー、フォン・ヤコブ、クラウスに於いて皆然りである。唯だザルトリウス及びフッフェランドは幾分独自の見解を表明し、「財貨の資本として使用し得ること」其の直接に欲望を満足するの力、即ち「生産價值」(Erzeugungswert)と「使用價值」(Gebrauchswert)とを區別し、フッフェランドは資本をして、初め暫く生産的放下を待つ所のものをも亦含めて、生産に使用せられ得る總べての財貨を抱擁せしめる。(a. a. O., S. 47)。  
ヘルマンを以つて觀れば、「土地」(Grund und Boden)はそれが所得を生ずる間持續する財貨たること明かなるが故に、之れを資本の下に置くことなきは不可思議である。(a. a. O., S. 48)。根本的事實は生産を助成する財貨の蓄積であるが故に、費用は資本の至要なる方面ではない。ヘルマンは又、土地と資本の間に區別を設けることなき他の理由として實際上是れ等のもの、間に區別を設けるの眞實の困難を提示する。土地は自から果實を與ふる自然力を有するも、固定資本は惟り其の効果を労働に負ふと稱せられる。而も労働なくしては極めて僅少の土地の果實が與へらるゝに過ぎず、他方に於いて、固定資本による労働の總べての援助は結局自然力の適用及び利用に歸するのである。(a. a. O., S. 50)。

ヘルマンは所得の見地よりして資本の概念に到達する。アダム・スミス及び其の他の人々は所得を以つて費用以上に出でたる生産的労働の収益の殘餘なりと做してゐる。然しながら、彼れを以つて觀れば、所得は實際に財産の利用であつて、生産は生産者に對する資本収益の關係に於いては、資本部分の媒介を通じて一の財産所有者に屬する其の所有物の直接利用を彼れに取つて更らに便宜なる形態と交換するに外ならざるものである。(a. a. O., S. 57)。  
彼れに従へば、資本は交換價值を有する利用のあらゆる持續的基礎である。彼れは一個人の財産即ち彼れが所有する外部財の高は(一)消費準備品及び(二)資本であつて、後者は(イ)住宅、家具其の他の如く、人が其の利用を直

接に享樂する使用資本(Nutzkapital) (ロ)人が交換財として價值の他の對象と交換するが爲めに利用し、斯くて間接に享樂する營利資本(Erwerbskapital)とに分たれる。營利資本は更らに(a)貸付資本(Leihkapital)及び(b)生産資本(Productivkapital)に分たれ、後者は又(aa)固定(stehendes oder fixes)及び(bb)流動(umlaufendes oder circulirendes)の二者に分たれる。固定資本の場合には、單に其の利用のみが生産物に移り、流動資本の場合には、資本其の者が生産物に變移する。(a. a. O., S. 59-61)。

彼れに従へば、土地、建物、家具、書籍、貨幣は持續的使用價值を有する。是れ等のもの、使用は其の利用(Nutzung)と名付けらる可きものであつて、そは是れに由つて、其の持續する間は、利子と稱せらるゝ交換價值を其れ自身に對して收得し得る本然の財貨として認められ得可きである。(a. a. O., vermehrte und verbesserte Aufl., 1870, S. 109)。  
彼れは資本を生産財若しくは貸銀基金と同一視せる彼れと同時代の人々と背馳する。斯くの如き資本の定義は、ブレンタノ(Lujo Brentano)が一千八百七十一年の Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. XVI. に掲げた Die Lehre von den Lohnsteigerungen mit besonderer Rücksicht auf die englischen Wirtschaftslehrer. 及び其の一千八百七十二年の著 Zur Kritik der englischen Gewerksvereine. に於ける貸銀基金説排斥の基礎と爲れるものであつて、今や多數の權威によつて承認せらるゝ所のものである。而して、そはヘルマンをしてセイの利子に關する生産力説をビーン・バツァークの所謂「利用説」に變ぜしめ、レントが自然的稀少に基く場合を除いては、之れと利子との間の區別を廢除するに至らしめたのである。

## 四

第四にヘルマンは價格に就いて論ずる。彼れの價格理論は是れよりも以前に行はれた最も傑出せる大陸經濟學者

等の研究の結果を綜合する需要及び供給の要素の周到なる分析である。彼れは當時の價格理論を以つて缺點多きものと觀た。彼れを以つて觀れば、特殊價格の決定に參加する諸要素は、當時の經濟學によつて明快且つ完全に表示せられて居ない。是に於いて乎、彼れは其の先輩よりも更に精緻なる注意を以つて、需要及び供給を分析して、價值及び價格決定に於ける特殊要素を論述した。雙方的競争の作用する際には、市場價格は需要及び供給によつて決定せられる。而も需要は三個の主たる要素に依存する。(一)欲求せらるる財貨の使用價值、(二)欲求者の支拂能力、(三)欲求せらるる財貨の他の方法に依る取得費、即ち或る他の市場に於いて之れを購入し、若しくは之れを生産する最低の費用が是れである。第一第二のものは買手に對する價格の主觀的限界を構成し、第三のものは其の客觀的限界を形成する。是れ等のものは價格に對して上部の限界を置くものである。(a. a. O., S. 67-76)。供給側に於ける要素は、(一)費用、(二)他の方法に依る販賣價格、(三)價格財(Preseiter)の交換價值、即ち價格と爲つて現るる其の財貨の交換價值である。是れ等のものは價值に對して下部の限界を設くるものである。(a. a. O., S. 76-96)。彼れは是れ等要素中の費用を述ぶるに際して、價格の變化と費用との交互作用を論じてゐる。(a. a. O., S. 82-88)。彼れは、再生産し得る財貨に取つては、費用を以つて決定的のものと考へてゐるが、而も需要に對して重要な地位を與へてゐる。(a. a. O., S. 95)。ヘルマンの理論は主として短期的價格の其れである。而して、そは發達せる價格均衡の概念を缺いてはゐるが、而も、貨幣的要素、即ち供給側に於ける貨幣價值、需要側に於ける所得分配及び價格水準、並びに市場組織と等しく主觀的評價をも亦注意してゐる。

ヘルマンは労働費用價值學說に對して鋭利なる批評を加へてゐる。彼れに従へば、労働は、其の生産上に資本が要部を占むる生産物に對しては、直接の關係を有することなく、労働者が、労働の供給の増減に由つて、利潤率と

共に其の生活資料の價值の變化に對抗し得る限りに於いてのみ、唯だ間接に之れに關係を有するに過ぎない。加之、幾分價值の尺度たるに適する財貨は、兩要素財、即ち労働及び資本を含有し、斯くて是れ等の兩者と共に直接に其の價格に於いて變じなければならぬ。(a. a. O., S. 131)。任意の高に於いて再生産し得ざる交換財は瑣末なるものであると做すは誤つてゐる。土地は這般の項目中に屬する。而して其の價值若しくは寧ろ其の利用價值は總べて他の生産物の費用及び價值の上に重要な影響を及ぼすのである。又、縱令ひ機械其の者が労働を含有するとしても、そは全く加工せられたる素材に移るものと思惟せらる可きではない。單に其の機械が使ひ果されたる限りに於いてのみ、そは素材として思料せらる可きである。大體に於いて、其の機械中に結合せられたる労働及び資本の利用は流通外に撤し去られて、單に利用の基礎たるに過ぎないのである。若し、労働費用が價值を決定し、相等しき労働を含有する財貨が相等しき條件を以つて交換せらるゝとしたならば、實だに2aの労働がa労働の二倍を購入するのみならず、a労働は常にa労働と交換せられて其の以上と交換せらるゝことなきの結果を來さなければならぬ。然るに、各々の生産物は其れ自身の含有するよりも以上の労働と交換せらる可きである。而も、生産物A中に於けるn労働が生産物B中に於けるm労働と交換せらるゝとしたならば、B中に於けるn労働は如何にして同時にA中に於けるmを購ひ得るのであるか。素材及び生活資料なくしては、即ち過去の労働なくしては、新たなる労働は所要の生産物を供給することを得ないと主張せらるゝならば、是れに由つて労働以外に猶ほ一要素、即ち資本の利用が生産物の産出に取つて必要であることが承認せられなければならぬ。而して其の生産物が其の含有する労働よりも高き交換價值を有するとしたならば、這般の資本の利用が實だに利用價值のみならず、交換價值をも亦有するところが是れに由つて自から明かと爲るのである。若し吾人が事實這箇生産物の第二要素を眼中に置くことなく、兩生

産物に於ける資本利用を同一と假定したならば、労働はよく生産物の交換価値を決定するものと思惟せられ得可きである。然しながら、之れが利用は二生産物に於いて實際上殆んど同一なることがない。實にマカラクによつて表明せられたるが如きリカードの法式は單に  $A=IA$  なりと云ふに過ぎざるものであつて、交換価値の本體は是れに由つて説明せらるゝことがないのである。(a. a. O., S. 133-134.)

五

第五にヘルマンは利潤に就いて論ずる。セイは、其の手中に生産的諸力を集合する者であつて、英國經濟學者によつて「資本家」(Capitalist)なる兩義を有する名稱を以つて呼ばれて居た者の最も重要な經濟的職能を表示するが爲めに初めて「企業家」(entrepreneur)なる名稱を使用し、而して其の利潤を論じたのであるが(Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent, et se consomment les richesses, tome II, 1803, p. 221 ff.)。獨逸に於ては夙にヘルマンは其の Neue Grundlegung der Staatswirtschaftskunst durch Prüfung und Berichtigung ihrer Hauptbegriffe, 1 Teil, 1807.) に於て、企業家の利得を以つて、半ばは危険に對する補償、半ばは企業家の才幹及び手腕に對するレントより成るものと做し、カール・ハインリッハ・ライウ(Karl Heinrich Rau)は其の Lehrbuch der politischen Oekonomie, 第1卷 Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1826. に於て、企業家の利得を以つて、資本及び労働間の内部關係より生ずる特殊の所得であつて、其の中に於て是れ等兩源泉の分前は分割し得ざるものと做してゐる。ヘルマンは更らに此の點を闡明せんとする。

彼れに従へば、n月間其の所有主の直接使用からa資本を撤去する一の生産物は、b資本をm月間使用せる他の生産物よりの利潤に對する、即ちanがbmに對するに等しき比率を有す可き餘剰を資本支出以上に其の價格に於いて齎せざるを得ざるものである。(a. a. O., S. 147.)。彼れは、土地を包含する資本の實際的勤務、即ち彼れの所謂利用が稀少であつて、斯くて又、レントとしての是れ等のものゝ支拂が一の生産費であることをセイと同じく主張する。(a. a. O., S. 151-199.)。而して、企業家の本然の所得は、一の目的に對して總べての營利手段を集合し、營に對して一の計畫を設定し、あらゆる人に與へられてゐない營利業務の管理に必要な能力及び才幹を供給し、又、彼れの利得が生産物の價格の動搖に依頼しつゝあるに拘らず確定せる利率を保證するの任務に對する報酬である。而して總べて是れ等の勤務は包含せらるゝ資本の高と共に變化する。斯くて企業家の利得は是れ等の勤務、管理及び危険に對する必要な報酬である。企業家の利得部分は(a)賃銀、小工業に於ける企業家の努力に對する補償と區別せらる可きものであり、且つ(b)そは又、總べての危険に對する賠償から區別せらる可きものである。斯くの如き賠償は全然所得ではなくして、常に眞の利得から慎重に分離せられなければならぬ。そは將來の損失に對して蓄積せざるを得ざる資本である。斯くの如き部分を所得として消費する工業家は其の基本財産を減少する。(a. a. O., S. 204-205.)

所有者が自ら使用することを欲せざる資本の高は企業家の勤務に對する需要を構成し、資本を生産的に投下せんとする者の數は其の供給を決定する。斯くて企業家の勤務と所得とは包含せらるゝ資本の高に關係を有するが故に、一定の總利潤が假定せらるゝならば、企業家の利得は利子の高と共に變化し、利子が昂騰すれば、彼れの利得は低下し、利子が低下すれば、彼れの利得は昂騰する。(a. a. O., S. 208.)

六

ヘルマンは次いで再び資本を論じ、固定資本に対する収益が、總収入と本原的費用及び置換費との間の相違であつて、其の當時の利率よりも上若しくは以下なることある可きを指摘する。彼れは斯くの如き収益を一のレントとして分類する。固定資本の一部が所有者を換ふると共に、それは市場に於いて、這般の投資の方面に特有なる危険の他に對して斟酌を行ひて、當時の利率によつて此のレントを割引するによつて評價せらる可きである。斯くて、所有者を換へたる後に於いては、此の固定資本に對する収益は、あらゆる他の資本の使用より取得せらる可き収益と一列ならしめらる可きである。固定資本の購入者は自由資本の所有者であり、自由資本に對しては市場は完全に競争的なるが故に、必然斯くの如き結果が生じなければならぬ。斯くの如きは、利率を決定するに於いて重要なものが、自由資本に對する市場に於ける支配的事情であることを明かならしめる。自由資本の供給は制限せられ、而してそは投下せらるゝ本源的の以上に収益を生ずることを期待せらるゝ多數の交替的方向に投下せらるゝことが出来る。前以つて投下せられたる固定資本は、そが所有を換ふるとするならば、自由資本の投入に對する競争的機會と同一の収益を生ずるが如き方法に於いて評價せられなければならぬ。斯くの如きは本源的の所有者に對する資本の損失若しくは利得に終る可きである。流動資本は當然固定資本よりも當時の利率を生ずるの傾向大なる可きである。蓋しあらゆる不足は固定資本の上に投げ掛けらるゝが故である。(a. a. O., S. 266-289.)

彼れは同じく資本の作用を論ずるに際して、種々なる根據よりして當時英國に行はれて居つた賃銀基金説に反對した。年代順から言へば、英國學者の傳統的賃銀理論から離れた最初の人は彼れヘルマンであらう。彼れはアダム・スミスが、資本と等しく所得を以つて賃銀の支拂はるる泉源たらしめたことを舉示して之れを稱揚してゐる。(a. a. O., S. 280.)。然も、彼れによつて行はれたる一定の叙述並びにラウ (Volkswirtschaft, S. 202. und 203 und S.

296. und 207.)及びマカラック(Principles etc., p. 104 u. 105. 2. Ed.)等の學説に従へば、労働を求むる者の數と資本の量とは賃銀を規制するものであり、資本に比して民衆が甚だ多ければ、賃銀は低く降り、反對の場合には、資本家に對して單に僅少なる所得を剩すに過ぎざる迄に昂騰するを得可きである。然も、ヘルマンを以つて觀れば、(一)縦し賃銀が流動資本部分に依存することが是認せらるゝとしても、資本全體に關しては何等の意義をも有せざるものである。總資本のより、大なる部分は固定せしめられて、更らに其れ以上に労働者の賃銀支拂に使用せらるゝことなきを得可きである。(二)屬人的の勤務を爲し、消費者の所得から直接に支拂はるゝ労働者の數は看過せらるゝには餘りに大である。企業家が労働を購入するは消費の爲めに非ずして、生産物の形態に於いて再賣するが爲めである。資本は特に賃銀の支拂はるゝ眞の泉源ではない。之れが眞の泉源は労働者によつて生産せられた物を購入する者の所得、略言すれば消費者の所得である。而も總資本の増加はより、大なる産物に對する需要を生ぜしむるに於いて賃銀の状態に對して間接の影響を有するものである。(Hermann, a. a. O., S. 280-282.)

彼れの意見に據れば、賃銀は資本によつて規制せらるゝと做す經濟學上の一般に普及せる誤謬は其の労働者に對する工業企業家の驕慢なる態度を助成するに資する所が尠くなかつたのである。賃銀支給者は自己の所得(労働若しくは利用)を以つて労働者の給付と交換すると云つても、彼れ等は全然平等に對立するものである。彼れ等は實に賃銀に對する全對價を保有するが故に、労働者を給養するものと自負することを得ない。却つて工業的企業を行ふ者は再賣の目的を以つて労働を購ふに過ぎざるものであり、單に消費者に對する労働の眞の販路を容易ならしむるに過ぎない。消費者は實際に先づ之れに對して賃銀を支拂ふのである。彼れは斯くの如き事業に其の流動資本を供用し、之れを自ら利用することなきに對して利潤を以つて賠償を受くるのである。斯くて、彼れは斷じて労働者



を給養するものではなく、却つて自己の資本利用の一部の一層有利なる賣却に労働の供給を利用するに過ぎない。労働者及び企業家は互に其の一方的給付の交換を、各々に對してより、有用なる形態に移ることを容易ならしむるのであり、斯くて又、平等なる地位に立つものである。(a. a. O., S. 283-285.)

斯くの如く、彼れは本書の初版に於いては、賃銀は資本に依頼すると做すの學說を有害なりと做すの理由を、企業家等が斯くの如き學說に教へられて、自己を以つて賃銀の眞給與者と思惟し、是れに由つて恩典と獎勵金とを受くるの權利ありと思惟するに在りと觀たのであるが、前掲一千八百七十年の再版に於いては、其の理由を、無學の労働者が斯くの如き學說に教へられて、賃銀の泉源は企業家の資本に在りと看做し、斯くて又、彼れ等をして無謀の同盟罷業を行はしむるに在りと説する。(Statistwirthschaftliche Untersuchungen, Zweite nach dem Tod des Verfassers erschienene, vermehrte und verbesserte Auflage, 1870, S. 477.)。洵に是れ等兩版の間に存する期間中に於ける社會狀態の變化が如何に著しかつたかを想見せしむるものがある。

ヘルマンの時代以後、獨逸人の手に成つた賃銀の問題に關說せる經濟學上の著書であつて、其の中に彼れの所論の影響が或る程度まで認められないものは殆んど無つたのである。リッスラー(Karl Friedrich Hermann Roesler)の一千八百六十一年の著 Zur Kritik der Lehre vom Arbeitslohn. に於いては、雇主の資本は労働者に取つて無關係なるものであつて、労働者は其の賃銀を偏へて消費者より引き出すものであり、雇主は單に仲介人に過ぎざるものであると云ふ意見が強調せられた。(a. a. O., S. 141.)。歴史學派の長老ウイヘルム・ロスマン(Wilhelm Roscher)も亦其の Die Grundlagen der Nationalökonomie. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende, 1854. に於いてヘルマンの意見を採用した。(a. a. O., S. 294 ff.)。

更らにヘルマンは第七に所得に就いて論じ、最もよく之に關する理論を展發せしめ、而して經濟の主眼として欲望の満足を強調する。(a. a. O., S. 294 ff.)。彼れは第八に財貨の消費に就いて述べ、消費の概念、消費に於ける過程、財貨の使用との關係、消費者の經濟との關係並びに國民經濟全般との關係に於いての消費を觀る。(a. a. O., S. 327-374.)。

死後の増訂版に於いては本書の編次は改められて、(一)基礎(二)欲望(三)財貨(四)經濟(五)生産(六)價格(七)賃銀(八)利潤(九)所得及び(十)財貨消費と爲つてゐる。